

## 移民が築いた南米最大の都市サンパウロ 移民100周年を前にしたサンタ・クルス“日本病院”の社会統合の歩み（現地報告）

著者	近田 亮平
権利	Copyrights 日本貿易振興機構（ジェトロ）アジア経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) <a href="http://www.ide.go.jp">http://www.ide.go.jp</a>
雑誌名	ラテンアメリカレポート
巻	23
号	2
ページ	74-78
発行年	2006-11-20
出版者	日本貿易振興機構アジア経済研究所
URL	<a href="http://doi.org/10.20561/00029346">http://doi.org/10.20561/00029346</a>

# 移民が築いた南米最大の都市 サンパウロ

移民100周年を前にしたサンタ・クルス“日本病院”の社会統合の歩み

近田亮平

## はじめに

サンパウロ<sup>(1)</sup>は20世紀を通じ急速に発展した、人口および経済の規模において南米最大の都市である。そして、この巨大な街を歩いていると、ヨーロッパ系、アフリカ系、アジア系、先住民系、そして、メスチーソ(混血)等、実にさまざまな異なる人種および民族の人々に出会う。これは、19世紀後半に始まるサンパウロ州を中心としたコーヒー産業の興隆以降、サンパウロが国内だけでなく、さまざまな国々からの移民<sup>(2)</sup>によって築かれてきた都市だからである。このように、移民を起源としたこれほどまでに多様な人種と民族で構成された都市は世界でも数少ないといえよう。

本報告は、移民、結びつき、統合(integração)をキーワードに、サンパウロという都市の歴史と現在を紹介するものである。その際に、サンパウロ市と州に最も人口が集中し、2008年にブラジルへの移民100周年を迎える日系社会に焦点を当てる。そして、“日本病院”と呼ばれてきた「サンタ・クルス病院(Hospital do Santa Cruz)」を具体例として取り上げながら、移民が築いた都市サンパウロの概観を試みる。

## 1. 移民が築いた都市サンパウロ<sup>(3)</sup>

現在、サンパウロ大都市圏には1913万人(2005

年)もの人々が居住し、ブラジル全体の30%強に達するサンパウロ州のGDPのうち、約半分をサンパウロ大都市圏が占めている<sup>(4)</sup>。しかし、1554年に創設されたサンパウロは、長い間、主に先住民とポルトガル移民や宣教師のみが居住する一地方農村であった。サンパウロの人口は1870年まで3万人を超えることはなく、ブラジル初の人口センサスが行われた1872年時点でも、ブラジルの全人口が993万人であったのに対し、サンパウロ市のそれは3万1385人であった。

しかし、19世紀後半から始まるコーヒー産業の興隆および1888年の奴隷制廃止が要因となり、1880年頃からヨーロッパ系をはじめとする大量の外国移民がサンパウロ州を中心に導入され、サンパウロ市の人口は急増することになる。1910年にはサンパウロ市の人口は約45万人へと増加し、そのうちほぼ2人に1人が外国生まれで、およそ4人に1人に当たる10万人がイタリア人であったとされ、まさにサンパウロの街は外国移民で溢れていた。

そして、外国移民と外国資本をもとにしたコーヒー産業を基盤に、世界の資本主義経済との結びつきを強めたサンパウロは、20世紀を通じた近代工業化の進展とともに、都市として急激な発展を遂げるようになった。市内および周辺には多くの工場が建設され、労働力として国内外から多くの移民を吸収しながら発展したサンパウロ市の人口



上：移民の街  
サンパウロの  
東洋人街リベ  
ルダージ

右：現在は移  
民記念館とし  
て公開されて  
いる旧移民宿  
泊所

(筆者撮影)



は、1960年には約37万人に達し、リオ市を抜いてブラジル最大の都市となった。20世紀末になるとサンパウロの人口成長は停滞することになるが、サンパウロを拠点とした国内外の人口移動は非常に活発である。今日では70以上もの異なる民族が共存するといわれるサンパウロは、世界経済とブラジル経済を結ぶとともに、ブラジルのみならず南米における経済拠点としての重要性を増しつつあるといえる。

なお、サンパウロ市内には1887年から1978年までの間、多くの外国移民を受け入れた移民宿泊所を改装してつくられた「移民記念館(Memorial do Imigrante)」がある。同記念館およびインターネットのサイト上<sup>(5)</sup>には、サンパウロ州への国内および外国移民数の推移を表1のデータをはじめ、ブラジルの移民に関するさまざまな情報や資料、展示品などが一般に公開されている。

表1 サンパウロ州への国内外移民数の推移(1820～1961年)

(単位：人)

時期(年)	合計	国内移民	外国移民	外国移民の割合(%)
1820～1900	974,177	965	973,212	99.9
1901～1905	205,297	11,565	193,732	94.4
1906～1910	200,487	10,301	190,186	94.9
1911～1915	356,045	17,019	339,026	95.2
1916～1920	128,539	28,441	100,098	77.9
1921～1925	279,548	56,837	222,711	79.7
1926～1930	409,086	155,821	253,265	61.9
1931～1935	275,446	156,242	119,204	43.3
1936～1940	350,320	293,852	56,468	16.1
1941～1945	148,826	144,063	4,763	3.2
1946～1950	445,389	384,359	61,030	13.7
1951～1955	973,586	762,707	210,879	21.7
1956～1960	676,984	517,624	159,360	23.5
1961	152,735	126,173	26,562	17.4
合計	5,576,465	2,665,969	2,910,496	52.2

(出所) Governo do Estado de São Paulo, Secretaria de Estado da Cultura, *Breve história da hospedaria de imigrantes e da imigração para São Paulo*, 2004, p.54.

(原出所) São Paulo( Estado ) Secretaria da agricultura, *Estatística dos trabalhos executados pelo Departamento de Imigração e Colonização durante o ano de 1961, 1962*, p.45.

## 2. サンタ・クルス“日本病院”<sup>＊6）</sup>

「笠戸丸」に乗った第1回日本移民が、移民の街サンパウロへ到着したのは1908年のことである。20世紀前半のブラジルは現在に比べ医療施設が大幅に不足するとともに衛生環境も悪く、主にコーヒー農園で就労していた日本移民のなかには健康を害する者が少なくなかった。1924年、このような同胞移民の劣悪な健康状態を危惧した医師をはじめとする日本人が、「同仁会」と呼ばれる有志団体を任意に結成し、病院設立のための募金運動を展開した。この運動は「日系社会の全面的な支持と支援」を受け、多くの同胞移民からだけでなく、当時の天皇、皇后両陛下からも寄付金が寄せられた。そして、1939年にブラジルの日系病院としては初となるサンタ・クルス病院(正式名「サンタ・クルス日伯慈善協会 Sociedade Brasileira e Japonesa de Beneficência Santa Cruz」以下、SC病院)が創設された。設立当時のSC病院は12の手術室と200の病室を有し、「日本人による看護指導を受けた看護師とブラジルのエリート医師を採用」した「ラテンアメリカのなかでも最も近代的な病院」であった。SC病院は日本移民によって創設、経営され、同胞移民をはじめ多くのブラジルの人々の健康改善に貢献したことから、「日本病院(hospital japonês)」の愛称で親しまれるようになった。

しかし、SC病院は第2次世界大戦時にブラジル政府に接収されることになる。日系社会との結びつきを失ったSC病院は、「日本病院」としての役割を果たせないだけでなく、ずさんな経営のため病院としても長い間「放置された」状態が続くことになった。終戦後、SC病院を取り戻す努力がなされたものの、戦後の日系社会の混乱や政治経済力の不足などから交渉は難航し、病院の経営権が再び日系人の手に戻ったのは1990年になってからで

ある。1990年以降、日系社会および日本との結びつきを取り戻したSC病院は、日系社会をはじめとする支援や日本の政府および企業からの援助等を受け、医療設備や慈善活動の規模を拡大、充実させてきた(表2)。

現在のSC病院は、非常勤を含め2000人以上にも及び医師や約900人の常勤スタッフの約3割が日系人で、日本語でのアテンドも可能である。また、患者の約3割が日系人や日本人駐在員が占めるなど、再び“日本病院”としての役割を取り戻す一方、医師やスタッフ、患者の約7割は非日系ブラジル人であり、ブラジル社会に深く根づいているといえる。また、SC病院には合計130人もの日系人を中心とした非常勤無給ボランティアがおり、医師と患者やその家族にとって仲介者的な役割を果たしているだけでなく、手芸品バザーを開催し病院の資金集めを支援するなどの活動を行っている。さらに、病院内には誰もが入会可能な合唱やフットサルなどの有志団体があり、文化・スポーツ活動を通じ地域社会との交流を深めている。これらの他にも、地域の慈善団体へ医療専門家をボランティアとして派遣するなどの援助活動も行っており、SC病院で勤務する人々はこれらの活動を総じて、社会の統合(integração)のための貢献と位置づけている。



サンタ・クルス病院の正面玄関で医師とスタッフの人たち(筆者撮影)

表2 サンタ・クルス病院の主要診療業務および設備の推移

	1992	2003	増加率(%)
入院(件)	7,061	9,568	35.5
手術(件)	5,220	14,112	170.3
外来診療(件)	39,927	122,538	206.9
緊急治療(件)	24,166	100,917	317.6
健康診断検査(件)	0	416,652	-
ベッド(床)	115	158	37.4
スタッフ(人:月平均)	476	864	81.5

(出所)注(6)のサンタ・クルス病院の参考資料をもとに筆者作成。

移民が築いた都市サンパウロには、同胞移民のための慈善団体が主に20世紀に入り多く結成され、現在でもSC病院のような外国移民が創設した病院がいくつかある。それらの代表的なものには、ベネフィシエンシア・ポルトゲーザ病院(ポルトガル系)、オズワルド・クルス病院(ドイツ系)、アルベルト・エインSTEIN病院(ユダヤ系)、シリオ-リバナス病院(アラブ系)などがある。また、SC病院以外の主な日系病院として、戦後設立された「サンパウロ日伯援護協会(Beneficência Nippo-Brasileira de São Paulo)」がある。各病院の歴史や経営形態などはそれぞれ異なるが、いずれもブラジルのなかでも質の高い医療機関として知られている。

これら外国移民を起源とする病院の中で先駆者的存在であるSC病院は、今日自らの出国国である日本、そして、国籍ではなく“ジャポネス(japonês)”という民族性との結びつきを強めることにより、ブラジルに住むさまざまな人々の健康回復と維持向上に貢献している。SC病院に半月あまり入院したある日系1世の元患者が、「ブラジルの病院で味噌汁やおにぎりの日本食が食べられ、NHKを観られるとは思わなかった。そして、退院の日にアフリカ系ブラジル人の看護婦さんに温かく見送られたことは今でも忘れられない。」と述べていた(7)。移民が築いた都市サンパウロにおけるSC病院の

存在意義と重要性を物語っているといえよう。

### 3. 発展のための統合と結びつき

外国をはじめ多くの移民を受け入れ、世界経済との結びつきを強めてきたことが、ブラジル経済の牽引車としてのサンパウロの発展を可能にしたといえよう。しかし、サンパウロの発展の歴史はブラジルの近代国家としての発展の歴史と重なる部分が多く、実はそれはまだあまり長くはない。

ブラジルが“発見”されたのは1500年であり、したがって、発見後のブラジルは今年ですでに506年もの歴史があることになる。しかし、奴隷制が廃止されたのは1888年で、連邦共和制に移行したのは1889年である。そして、国家としての近代化を推し進め、現在のブラジル国民の形成につながった各国移民の流入では、ドイツ移民は比較的早く1824年だが、イタリア移民は1870年、アラブ系移民は1880年、スペイン移民は1890年、日本移民は1908年である(8)。つまりブラジルが植民地でも帝政でもなく、現在のような近代国家としての道を歩み始めてから、そして、その国民である“ブラジル人”が形成され始めてから、実はまだ100年あまりしか経っていないのである。したがって、国家と国民が依然として形成途上にあるブラジル、特にブラジルの近代化の歴史を象徴する都市サンパウロでは、SC病院の事例からもわかるように、社会の統合(integração)が重視されるとともに、頻繁に主張されるのである。

ブラジル社会の統合について、1978年のブラジル日本移民70年祭のシンポジウムにおいて、日本の国立民族博物館の梅棹忠夫館長(当時)が日系社会という視点から次のように述べている。「統合ということは、文化的なアイデンティティを全く失ってしまうことを意味するものではない。ブラジルについて言えば、日系人が日本の文化の諸要素を完全に失ってしまって、ブラジル基層文化の中に



吸収され、埋没してしまうことではない。日本の文化的伝統の中に、この国の発展のために役立つような部分があるとすれば、それを大いに役立ててこそ『統合』の実があるのではなからうか<sup>(9)</sup>。」

この梅棹忠夫館長の言葉や本報告のSC病院の事例が示しているように、多くの移民を受け入れ、多種多様な人種と民族が共存するブラジル社会の統合は、それぞれの民族がブラジルの発展に役立つような自らの文化的伝統を持ち寄ってこそ、実現し得るといえよう。そしてさらに、世界との結びつきを深めることでサンパウロがブラジル経済の中心都市となり得たように、また、日本との結びつきの復活がSC病院再生の一要因となったように、さらなる発展につながるブラジル社会の統合を国内だけの問題としてではなく、グローバル化する世界との結びつきのなかでとらえることが重要なのではないだろうか。

最後になるが、このことは、2008年にブラジル日本移民100周年を迎える民族集団“japonês”，つまり“われわれ”にも当てはめて考えることができるであろう。グローバル化がますます進展し、ヒトやモノが国境を越え頻繁かつ瞬時に移動する現在、ブラジルの日系人と日本人、日本の日本人と日系人にとって、“japonês”という民族性をベースにしつつ、広く世界との結びつきを深めていくことが、今後、自らが属する社会の統合とその発展に寄与し得る一つのカギとなるのではないだろうか。

〔謝辞〕本報告の調査実施および原稿執筆に際し、サンタ・クルス病院の医師やスタッフの方々をはじめサンパウロの日系社会の皆様大変お世話になった。心から感謝の意を表したい。

注

(1) 本報告書で言及する「サンパウロ」とは「行政

単位等とは関係のない、都市としてのサンパウロ」を意味する。行政単位としての市(ムニシピオ)や州、また法律で定められた大都市圏を意味する場合には、それらを付記することとする。

- (2) 本来「移民」とは、「個人あるいは集団が永住を望んで他の国に移り住むこと」(『大辞泉』)を意味するが、現在では「国内移民」や「内国移民」など国内の移住にも使われる傾向にある。したがって、本報告書で言及する「移民」は、「国境とは関係なく、永住を目的として別の場所に移り住むことおよび者」を意味するものとし、必要な場合には「国内」または「外国」等を付記する。また、永住を目的としない短期の移住や滞在も含む場合には、「移民」ではなく「人口移動」と表することとする。
- (3) サンパウロの移民の歴史等については、Okky de Souza, *São Paulo 450 anos luz*, São Paulo: Editora de Cultura, 2003; Octávio Cabral, “Imigrantes transformam vila em 3ª maior cidade do mundo,” *Folha de São Paulo*, 23 de janeiro de 2000等を参照。
- (4) Fundação SeadeおよびIBGE(<http://www.seade.gov.br/> 2006年9月20日閲覧)。
- (5) 移民記念館のサイトは、<http://www.memorialdoimigrante.sp.gov.br/>。
- (6) SC病院の概要については、Sociedade Brasileira e Japonesa de Beneficência Santa Cruz, *Relatório de 10 anos de atividades: 1993 a 2002*, novembro de 2003; サンタ・クルス日伯慈善協会『ブラジル日本移民100周年 サンタ・クルス病院事業計画』; 2006年9月11日と15日に実施したYuli Fujimura広報・病院案内責任者をはじめとするSC病院関係者に対するインタビュー調査、等にもとづいている。
- (7) SC病院の元患者であるT氏に対し、2006年9月14日に行ったインタビュー調査より。
- (8) IBGE, *Brasil: 500 anos de povoamento*, Rio de Janeiro: IBGE, 2000.
- (9) 記念誌編纂委員会編『ブラジル日本移民 戦後移住の50年』ブラジル・ニッポン移住者協会, 2004年, 313ページ。

(こんた・りょうへい/在リオデジャネイロ海外派遣員)